

6. 自然の恵み

6-1: 生き物

(1) 植物 — (宮崎植物研究会: 河野耕三先生)

① 耳川の流域と河辺にみられる植物

耳川の流域は森林が育つに十分な自然条件を備えており、暖かさの違いから海拔1,000m付近を境にして、植物の分布に特徴があります。また、耳川の下流部には沖積平野が形成されていないため、県内の河川とは異なった河辺植生が見られます。

[6-1-(1)-①]:

(I) 流域の植物・植生

植物が発芽生育し、幾世代も存在し続けられる背景には気候条件や土壌条件などの他、たくさんの要素があります。その中でも流域の植生に対して大きな影響力を持つものは気温と降水量の条件です。その点、耳川流域の年間平均降水量は下流部で約2,400mm、上流部では3,000mmを超えるところもあり、全域で森林が育つに十分な条件を備えています。しかし、気温の方は海岸から海拔1,739mの国見山まであり、上流と下流では相当な温度差があります。

ところで植物の生育に必要な最低温度は5℃だと言われています。この数値を基準に、月平均気温が5℃を超えた数値を1年を通じて合計した温度を暖かさの指数と言います。指数が85~180であれば照葉樹林、45~85であれば夏緑広葉樹林となります。耳川流域では下流で約134、上流部に位置する上椎葉でも約124あります。85以下になるのは耳川上流部でも源流に近い海拔1,000m付近より高い所からです。

耳川流域を温度(暖かさの指数)を参考に、海拔高度の違いによって植物の垂直的な分布を見てみると大きく次のように分けることができます。

【海拔1,000m以上・夏緑広葉樹林帯】

冷涼な気候を好むブナ、イヌブナ、ミズナラ、コハウチワカエデ等が優占する森林が生育しています。山頂部岩場付近にはツクシドウダンツツジ、ツクシシャクナゲ、オオヤマレンゲ、湿性谷

状地にはサワグルミ、シオジ、カツラ、オヒヨウなどが見られます。又、キレンゲショウマ、ワタナベソウの他、ミヤマビャクシン、ウスユキソウ、ヤハズハハコ、レイジンソウなど、日本列島の変動や気候の変動をくぐり抜けて生き延びてきた大変稀少な植物も見られます。

【海拔1,000m以下・常緑の広葉樹(照葉樹)林帯】

海拔およそ1,000~750mには常緑針葉樹のモミやツガが優占し、アカガシ、ウラジロガシなどのカシが混生した樹林が見られます。発達した古い森林では着生植物のオサラン、カヤランなどを見ることがあります。海拔およそ750m~450m付近にはウラジロガシ、シラカシ、ツクバネガシ、イスノキなどが優占したカシ林が見られます。又、海の影響が少なくなった福瀬付近から上流の海拔およそ600m付近の谷沿いにはイチイガシ、コジイ、タブノキ、ウラジロガシなどが優占したカシとシイの混生林が見られます。今でこそ絶滅に瀕した植物にリストされていますが、かつてはカシ林には多くのラン科植物、例えばフウラン、ナゴラン、セッコクなどの着生植物をはじめ、エビネ、キエビネ、ガンゼキラン、カンランなどを見ることが出来ました。福瀬神社の境内には宮崎版レッドデータブック準絶滅危惧にランクされ、この種では世界最大級のハナガガシを見ることが出来ます。海岸付近の海拔およそ300m付近にはスタジイ、アラカシ、タブノキ、ヤマモモなどが優占する森林が見られます。耳川河口右岸の権現山にその典型的な姿を見ることが出来ます。

※写真の出典: 宮崎県の保護上重要な野生生物、宮崎県



フウラン

ナゴラン

エビネ

キエビネ

ガンゼキラン

カンラン

ハナガガシ

(II) 河辺域の植物・植生

河川水に強く影響を受ける河辺域の空間だけに限ってみると、同じような気温条件であれば水量と水の流れる速さの違いによって生育する植物の種類や成立する植生は大きく異なってきます。一般に大きな河川は山地峡谷型の上流部、低山地谷型の中流部、低地平野型の下流部に区分されています。こうした河川環境の違いが河川水辺に生育する植物や植物群落に特徴を創り出しています。しかし、耳川では下流部に沖積平野が形成されることなく日向灘に注いでいるため真の意味での下流部は存在しません。したがって、県内の大淀川をはじめとする大きな川の下流部に一般に見られる湿地性のヨシ、セイコノヨシ、マコモ、ヒメガマなどの群落や、アカメヤナギやジャヤナギなどからなる高木性のヤナギ群落などを見ることはほとんどありません。

耳川源流の湧水辺にはウチワダイモンジソウやジンジソウ、ナルコスゲなどが見られます。少し下った溪流辺の湿った岩場にはアワモリショウマ、ヒユウガギボウシ、セキショウなどが、

砂地や礫地にはツルヨシなどの河辺植生が見られるようになります。川幅も広くなる岩屋戸ダムから山須原ダム付近の河辺沿いにはツルヨシをはじめ、ノリウツギやツクシヤブウツギなどの夏緑広葉低木を交えた河辺低木林が見られるようになります。山須原ダムから大内原ダム付近にはツルヨシ、ネコヤナギなどの河辺植生や、トダシバ、ホソバコンギク、ナンテンハギなどがらなる河岸岩上植生、南限植物のカワラハンノキを含むハルニレ、メダケなどの河畔林が局所的に見られるようになります。大内原ダムから下流になると水の流れるも一段と緩やかになり、ツルヨシ、メダケ、ホテイチク、マダケ、モウソウチクなどの他、エノキ、ムクノキ、タブノキなどの混生した様々な河畔林が所々に見られるようになります。河口付近には大きな礫質の中洲が発達していて、希産種であり絶滅危惧種でもあるオオバナムと、アキグミ、ネムノキ、アカメガシワ、エノキなどが混生する独特の河辺低木林を見ることが出来ます。

自然の恵み ― (耳川文化の会: 中田 豊さん(東郷町)のお話)

春と言えば草木の新しい芽が出て冬眠から醒めた大自然の息吹が活発となるにつれて鳥や獣や昆虫まで一斉にそぞろ動きだす姿が見られる。

道端や田圃の溝には土の中で冬を過した蛙が出て来て卵を産み落とし、やがてはオタマジャクシが育つようになる。

裏作の麦など作っていない田圃はれんげが花の絨毯を敷いたように一面がきれいになる。それまでは牛や馬の飼料がなかったため、「草切りに行ってこい」と言われた子供は、そのれんげ草に目をつけて友達を誘って草切りに行き、他人の田圃の一番よく出来たような所のれんげを切っては見つけれられてよく叱られたものである。

子供達は草切りは程々にして今度は遊びに興ずる。家から鉈を取出して山から樫の木を切って来て五十センチ位に切って先をとがらし、一人で数本宛持って「ゴイ」の遊びが始まる。「ゴイ」と言うのは田圃の中に相手が立てた木に自分の木を立てながら強く当てて倒れたらその木は自分のものになる遊びである。これが面白いのでつい時の経つのも忘れて帰りが遅くなることもあった。

これは男の子だけの遊びであるが、野原や土堤に芽を出したツバナを取って中身を開くと穂になるばかりの軟い白身がある

のでそれを食べたりしたが、そのツバナを何本も寄せ合せて立て、それを目掛けて一本のツバナを投げ掛けて倒す遊びをした。

今はテレビで時々見るが、竹を切ってきて竹馬を造り、はだしで乗って馴れてくると競争したり、又足場を高くして乗ったりしてよく遊んだ。

養蚕が盛んであったから畑の中だけでなくあちこちの土堤にも桑の木が植えてあり、大分古い木もあったが、桑の花が咲き実がなる頃になるとそんな古木には特に実がたくさんなって、子供達はみんなでその実を食べ唇が紫色になることがあった。

川端に行けば「サドガラ」(いたどりのこと)を取って食べ、山や谷間に行けば自然のイチゴを取って食べ、水鉄砲のような格好に造った「イチゴポッポ」の中に入れて掲ぎあま酢ゆい汁を飲んだり到着処で自然の中に食べ物を見つけて食べ自然と共に生きている感じであった。

その頃は農薬の散布がなかったため、トンボや、蝶や虫などたくさん昆虫類が野や山やそして田舎の家の周囲で繁殖し、麦を刈ってホタル籠ができる頃には何処も其処もホタルの群れがいっぱいで子供達は勉強もそこそこにホタル捕りに出掛け、「ホーホ、ホタルコイ、アッチノ水ハ苦イソ、コッチノ水ハ甘イソ」と繰返し大きな声ではやしなながらホタルを捕って遊んだりした。

② 耳川水系の環境変化

戦後間もない昭和25年頃までの植林は、村落に近い地味の良
い里山を中心に限定的に行われてきました。しかし、昭和25年頃
から戦中戦後乱伐された跡地に対する植林活動が開始され、更に
昭和32年からは拡大造林政策が推進される中で植林面積は急速
に拡大していきます。5年間で植林される面積は、それまでの何
百倍のスピードで広がっていきました。また、これまでの交通の
便利な地味の良い場所のもとより、奥地までスギやヒノキ、クヌ
ギなどが植えられていきました。その結果、昭和54年頃までには
森林面積のおよそ60%が人工林になりました。

ところで、人工林が増えたことにより自然環境にも変化が起こ
ってきました。たとえば、植生を中心とした自然景観や野生生物
の減少です。自然景観では耳川河口付近から源流部に至る自然の
緑の装いが、季節毎に大きく変化するものから単調に変化するも
のになってきています。かつては源流部一帯に広がる夏緑広葉樹
林が四季毎に大地を装い、中～下流域に広がるカシ林・シイ林・タ
ブ林等の照葉樹林が初夏に色とりどりの新緑で装うなど、それぞ
れ感動的な自然景観を創り出していました。しかし、自然林が人
工林に置き換えられていく中、自然とともに変化する大地の変化
は薄らいでしまいました。

一方、そうした植生の変化は大きな森の樹と共生してきたナゴ
ランやフウランと言った着生植物、特定の植物に寄生している植
物や動物にも影響を与えてきました。動物ではコノハズクやクマ
タカと言った猛禽類をはじめ、ニホンサルやムササビ、ヤマネな
どの動物が減少してきました。

また、植生の変化は、水資源の涵養機能や山地崩壊防止などの
森林がもつさまざまな「保全能力」に影響を与え、さらには、腐植
層の浸透性やフルボ酸鉄等の形成能力を低下させることにより、
水生植物や魚介類の生息環境などに少なからぬ影響を与えてい
ることが指摘されるようになってきました。



(2) 魚類 — (宮崎大学農学部附属水産試験場: 神田 猛先生)

耳川上流の水のきれいなところには、ヤマメやタカハヤがすんでいます。中流では、アユ、オイカワ、それにカワムツなどが多くすんでいます。下流から海にかけては、コイ、ギンブナなどのほかに、アカメやカマキリなどのめずらしい魚もすんでいます。また、川と海の間を行き来する多くのハゼの仲間もいてにぎやかです。さらに、美々津の近くの海にすんでいる魚や貝などの生き物たちも、耳川から海へ運びこまれた栄養をもとにして育てています。

[6-1-(2)]: 魚は、それぞれの種にとって適した場所で生活します。生息場所の水温、流れの速さ、流れる水の量、川底の性質、岩に生えている藻類の量、水生昆虫の量、水草があるかないかなどの生活条件が違えば、棲んでいる魚も違ってきます。

耳川で見られる魚を上流域、中流域、下流域、それに感潮域の4つに大きく分け、それぞれの水域に見られる魚を挙げると以下のようになります。

●上流域(岩屋戸ダムより上流部)

ヤマメ、タカハヤ、ウグイ、カワムツ

●中流域(岩屋戸ダム～大内原ダム)

アユ、タカハヤ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、ヨシノボリ類

●下流域(大内原ダム～感潮域の上限)

アユ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、モツゴ、メダカ、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、カマキリ、ボラ



●感潮域(海水の影響を受ける流域)

アユ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ユゴイ、アカメ、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、ヒナハゼ、マハゼ、ミミズハゼ、シロウオ、ボラ、ギンガメアジ

上記の魚種のうち、タカハヤ、ウグイ、カワムツ、オイカワ、コイ、ギンブナ、カマツカ、モツゴはコイ科と呼ばれるグループに属し、ボウズハゼ、スミウキゴリ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ類、チチブ類、ヒナハゼ、マハゼ、ミミズハゼ、シロウオは、ハゼ科と呼ばれるグループに属します。

カワムツにはA型とB型がそれぞれ別種とされていますが、耳川で見られるのはカワムツB型です。ヨシノボリ類にはシマヨシノボリ、オオヨシノボリ、トウヨシノボリなどが含まれています。チチブ類にはチチブとヌマチチブが含まれていますが、耳川ではヌマチチブの方が多いようです。カマキリは、別名アユカケとも呼ばれるカジカ科の魚です。

なお、普通の観察では見つけにくいので、ここには挙げませんが、ウナギは広い範囲に分布しているものと思われます。人の手で放流されて棲むようになった魚としてニジマスとワカサギがいます。さらに、ブルーギルやブラックバスなどもいるとされています。

「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編)」

によると、先に挙げた魚の内、メダカは絶滅危惧種、アカメ、カマキリは減少種、タカハヤ、シロウオは減少傾向種に挙げられています。これらの魚はもちろんのこと、他の魚に関しても生活環境を保護していく必要があります。また、本来生息していなかったワカサギを放流することにも慎重でなければなりません。ブルーギルやブラックバスなどの生態系に与える影響の大きな外来魚の移植は禁止されているので、放流してはいけません。

耳川の魚の分布を考える上で重要なことは、流域にあるダムが存在です。川をせき止めるダムを越えて魚が移動するための魚道がないので、魚は移動をはばまれています。特に、アユやハゼ科魚類等の通し回遊魚に与える影響は大きいと考えられます。実際に、卵からふ化した直後の仔魚期を海で過ごすハゼ科の魚は、大内原ダムより上流部ではごくわずかしきません。また、上流域で育ったアユが下流域の産卵場に降河できないため、耳川生まれのアユは育っていません。

川は、そこに棲む生物を守り育てているばかりでなく、陸上の栄養分を水に溶かして海へ注ぐことにより、海の生物も育てています。河口の近くには、さまざまな生物が生活する豊かな海が広がっています。美々津周辺の海で見られる魚や貝などの生物は、耳川の恩恵を受けて育っていると考えるのも良いでしょう。

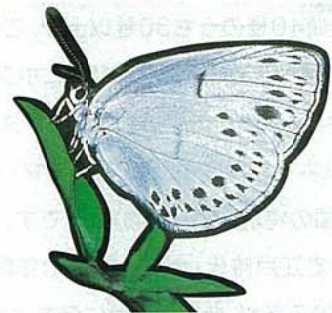
※通し回遊魚:一生のある時期を海で過ごし、別の時期は川で過ごすため、川と海の間を行き来する魚類。

(3) 昆虫類 — (日本野鳥の会評議員:中島義人先生)

耳川の上流は豊かな自然が残っているため、
いろいろな昆虫がいます。

[6-1-(3)]:耳川流域の上流(塚原ダム~上流)には、オニヤンマ・ミヤマアカネ・ミスジチョウ・オオムラサキ・コベニモンメクラガメ・アカシジミ・ウラゴマダラシジミ・オオウチワグンバイ・ヨツボシメクラガメが見られます。

中流(大内原ダム~塚原ダム)にはハグロトンボ・オオムラサキが見られます。



ウラゴマダラシジミ

(4) 鳥類 — (日本野鳥の会評議員: 中島義人先生)

耳川の流域には、九州に住む野鳥のうち、約半数の種類がいます。

【6-1-(4)】: 耳川の流域には、宮崎の野鳥336種のうち、半数以上が生息しているといわれています。また、ダム湖が五つあることから、オシドリやカモ類などの水鳥も渡来します。流域の地形はかなり険しくV字谷もあることなどから、クマタカなどの猛禽類やカッコウ・ツツドリ・ホトトギス・コノハズク・ブッポウソウ・キビタキ・オオルリ・ゴジュウカラ・ホシガラスなどの低地では生息しない鳥類の生息地になっています。

上流域(塚原ダム～上流): アオサギ・オシドリ・ヤマセミ・カワガラス・ハシボソガラスなど

中流域(大内原ダム～塚原ダム): オシドリ・セグロセキレイ・ハシボトガラスなど。

下流域(河口～大内原ダム): コサギ・アオサギ・マガモ・カルガモ・ヒドリガモ・ヨシガモ・キセキレイ・セグロセキレイ・ヒヨドリなど。



ブッポウソウ



コノハズク



オオルリ



クマタカ



ホシガラス



ヤマドリ

(5) 哺乳類 — (日本野鳥の会評議員: 中島義人先生)

耳川の流域は野生動物も多く、九州にいる40種のうち30種がいます。

【6-1-(5)】: 耳川の流域には、地形的に険阻地が多く、山地は照葉樹林が繁茂し、野生哺乳類の生息地となっています。九州全体に生息する哺乳類40種のうち30種以上が、この地帯で見られます。その主な種はヒミズ・コウベモグラ・ニホンザル・ノウサギ・ムササビ・ヤマネ(国の天然記念物)・スミスネズミ・カヤネズミ・アカネズミ・キツネ・タヌキ・イタチ・アナグマ・イノシシ・ニホンジカ・カモシカ(国の特別天然記念物)などです。

諸塚村において江戸時代(今から約160年前)に捕獲されたクマの足などの加工品が、諸塚資料館に保存されています。

※ 険阻地: けわしいところ。



カモシカ



ムササビ



ニホンザル



ヤマネ



スミスネズミ

6-2: 景観
けい かん
けい こく び
 (1) 溪谷美



かんのんだき うえのぼる
 観音滝(西郷村上野原)



だき おぼる
 おせり滝(西郷村小原)



おまえけいこく
 尾前溪谷
 (椎葉村尾前)



(2) 河口の河岸林

耳川の河口に広がる樹木地帯は、豊かな自然に恵まれた、耳川の代表的な風景です。

【6-2-(2)】：耳川の河口部は、流水の力によって掘込まれた形状をしています。また、右岸の急な河岸には、数多くの高木が自生しています。耳川の流れとこれらの樹木群が創り出す、水と緑にあふれた景観は、豊かな自然に恵まれた上流の渓谷群と山岳地帯を連想させ、耳川らしさにあふれた川の玄関口を演出しています。

※右岸：川の下流に向かって右側の岸。



耳川河口



河口近くの河岸林

※河岸林はクスノキが多く、タブノキやスダジイなどの常緑広葉樹林やハマセンダンなどの落葉高木で構成されています。中には樹齢100年を超え、直径1m以上、高さが20m以上の大木もあります。

日向市

(3) 流域を代表する景観



立石地区の桜並木

西郷村

りゅう いき だい ひょう けい かん
流域を代表する景観

椎葉村



尾前溪谷



アケボノツツジ(諸塚山)



諸塚山の冬景色



諸塚村と西郷村の間を流れる耳川

諸塚村



ブナ林の樹氷(諸塚山)



諸塚山の紅葉

東郷町



楠森塚



冠岳



尾鈴山系



坪谷川

6-3: 耳川の幸 (1) 鮎 漁

アユはむかし、耳川のもっとも有名な産物でしたが、近頃ではたいへん少なくなっています。古い漁法も今ではあまり行われていません。

[6-3-(1)]: 耳川は海までの距離が約100キロメートルもあり、このうち約半分が急流と清流に恵まれて「鮎」の棲息に適していました。「日向地誌」によると明治初年、東郷町の鮎の漁獲高は42,000匹で、大正4年の記録によると漁獲高は15,000キログラムをこえ、昭和の初めの頃は日豊本線を利用して遠く阪神方面までも出荷する盛況ぶりでした。



① 鮎なで漁

むかし鮎は、網ですくってもとれるほどたくさんいました。

[6-3-(1)-①]: 昔は洪水の後で、上流で育った30cmもあるような大鮎がとれました。洪水で流れ落ちた鮎が、川岸を伝って上流へ遡上する時、岩角に立って、長い竿の先についた網ですくうだけで、大鮎が網に入るといこともありました。美々津の大鮎は「耳川の鮎のウルカ」と共に全国でも名高い名物でした。

※ウルカ: 鮎の内蔵や子を塩漬けにした食品。

② ヤナ堰

木や竹で作ったヤナで川に堰をつくって鮎をとる方法もあります。

[6-3-(1)-②]: 耳川には鮎をとる仕掛の『ヤナ堰』が上流、中流、下流にそれぞれかけられていました。一つのヤナ場には一定の組員がいて、秋風が吹き出す頃になると、木材、竹、縄、カズラの準備をして、川ざらえ、石並べ等の作業を仕上げてヤナ場を作り、それぞれのヤナ場で落ち鮎を待ちました。収穫は組員数で割り、分け合っていました。



③ 鮎^{あゆりょう}漁^{げんしりょう}の減少

ダム^{けんせつ}の建設などで鮎^{あゆ}が減ったために、現在では稚魚^{ちぎょ}を放流^{ほうりゅう}しています。

【6-3-(1)-③】：耳川の鮎^{あゆ}漁は、その豊富なことにおいて県下第一とされてきましたが、ダムが鮎^{あゆ}の通行を止めたため、量が減少しました。そこで現在ではアユはすべて稚魚^{ちぎょ}の放流^{ほうりゅう}による方法で増やしています。

(2) ふしイダ^{りょう}漁

大きく育ったイダ^{ウグイ}が浅瀬^{あさせ}にいるときは、投網^{とあみ}でとりました。

【6-3-(2)】：三月中下旬になると坪谷川^{つばやがわ}の支流^{さんらん}に産卵のために川^{そじょう}を遡上する、とても大きなイダ^{ウグイ}が浅瀬^{あさせ}にうごめいているのを見ることができました。このイダ^{ウグイ}を見つけた漁夫^{ぎよふ}たちは、投網^{とあみ}で一網^{いちもう}打^だ尽^{じん}にしていました。中には卵^{たまご}を腹一杯^{はらいっぱい}つめて50cm近くあるイダ^{ウグイ}もいました。

(3) シロウオ^{りょう}漁

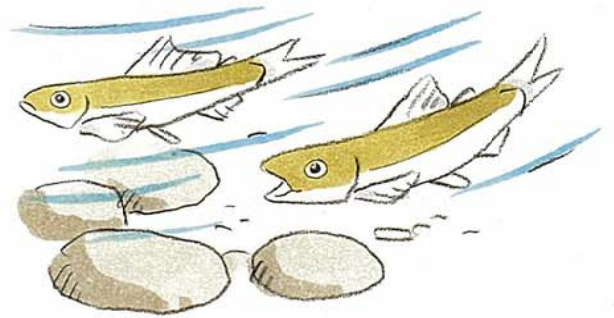
シロウオは網場^{あば}に夕網^{ゆふあみ}を沈めておき、引き上げてすくい取ります。

【6-3-(3)】：シロウオは早春^{そうしゆんき}に産卵^{さんらん}のために川^{そじょう}を遡上^{そじょう}してきます。シロウオ漁は、川岸^{たけし}に竹柴^{たけし}などで網場^{あば}を作り、直径約1mほどの夕網^{ゆふあみ}を沈めておき、引き上げてシロウオをすくい取る漁です。

(4) 川ガニ^{りょう}漁

川ガニをつかまえるには、カゴ^{かご}が使われています。

【6-3-(4)】：川ガニは秋風が吹き出すと上流より下流に下がってきます。夕刻^{ゆふぐ}、カゴ^{かご}の中に餌^えを吊し、周囲に重り石をつけて川の中流付近^{ちゅうりゅうひきん}に沈めておきます。翌朝^{あした}早くに引き上げてみるとカゴ^{かご}の中に大小さまざまなカニが入っています。



カニ^{かご}漁の籠



さまざまな川の幸

ほかにも、魚の種類をあわせていろんな仕掛や取り方がありました。

鮎梁

産卵で河口に鮎が下る9月下旬以降に川に堰をつくり、梁をつくって一定の場所に鮎の落ちる棚を設けて取る。

チョン掛け

竹竿の先にテグスをくくって針をつけ、川に入って箱眼鏡で鮎を見て引っ掛ける。水中眼鏡をかけて川にもぐって泳ぎながら掛ける方法もある。

投網漁

下り鮎の頃、竹柴を川に横に並べて立て鮎が集ったところをねらって網を打つ。(柴堰)

サビキ

川が薄濁りになったとき、鮎が瀬についた頃、1本のテグスに14~5本の針をつないで川の中を無雑作に引き廻してとる。

濁りすくい

台風や大雨のとき、川が濁るので、河川が氾濫した機を見て川岸から大網で鮎などをすくいとる。

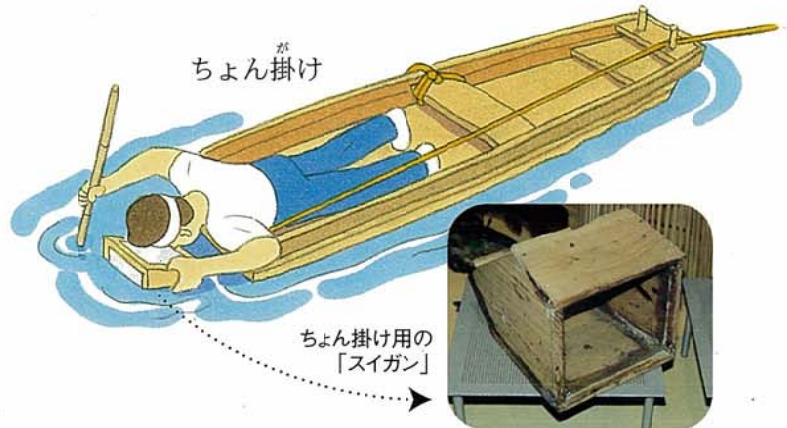
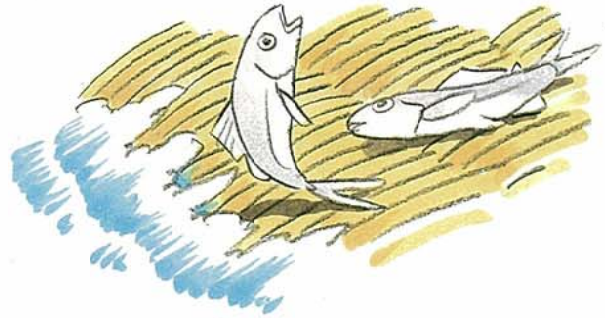
罎掛け(友釣り)

鮎の縄張りの習性を利用して、長さ6~7mの竹竿の先からテグスを延ばし、鼻環を通した鮎をつけ、別に尻部に3本の針をつけ、川底の石の多い瀬に放ち攻撃してくる鮎を掛ける。

鰻ポツポ

直径10cmほどの円形で約60cmの長さの籠の中にミズズや生えび、鮎などの餌を入れて川底につけて、翌朝上げて中に入っている鰻をとる。

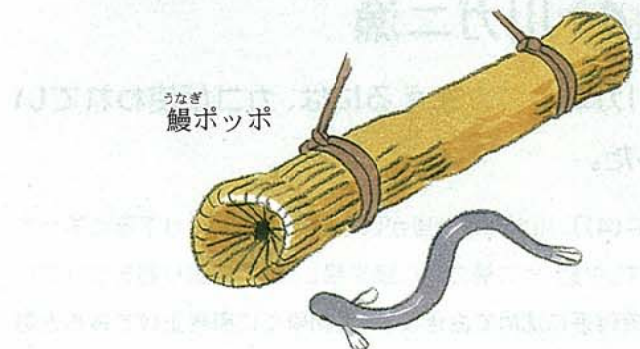
あゆやな 鮎梁



(宮崎県総合博物館展示)



とあみりょう 投網漁



うなぎ 鰻ポツポ

うなぎつ
鰻釣り

70cmぐらい細い竹竿の先に、紐で結んだ針をひっかけて水中の穴の中に差し込んで釣る。

イダ(ウグイ)

籠の中にさなぎ粉、油粕、赤土などを練り合わせたものを餌にして入れ、やや深いところにつけて翌朝引き上げてとる。

こいつ
鯉釣り

鯉は川の淵の深いところにいるので、ふかした芋などを餌にして4月から12月頃までかけて気長に釣る。

かに
蟹

蟹は籠に餌を入れて夕方に川につけ込み、翌朝引き上げてとる。

うけ
笥

小川の適当な所に竹柴や石を並べたりして流出口を狭くして、そこに竹製の尻つぼみの笥をつけて流れ込んだ雑魚をとる。

いし
かんめ石

川の浅瀬には大きい石が水面すれすれに頭を出しているところがある。こんな所には小魚を無数にいたので、その石の上にやっと持ち上がるような石を頭上から落しかける。その下にもぐっている小魚は衝撃のためふらふらと出て来るのでそれを捕らえる。

ほか
その他

金つき、えびすくい、夜間に火を点して釣る夜釣りなどがあつた。

鰻釣りの道具

